

## 一 地域生活のための基本的な考え方

一九八〇年代のアメリカで、身体障害者を中心として、どんなに障害が重くても地域の中で生活を可能にしていこうという自立生活運動（IL運動）インデペンデント・リビング運動）が起こった。

この運動の中で、障害児（者）が地域生活を行っていくために指標となる基本的な考え方や具体的なプログラムが提案され、「自立」と「自律」の追求が強調されている。特に、知的障害の場合は、この内容の達成は乳児期からの育ちのなかで意図的、段階的、継続的に積み上げられることが必要とされている。

## 二 知的障害児（者）の自立とは

自立とは、自ら主体的に独立した生活を営むことを意味するが、知的障害をもつ人たちにとって自らの力で家庭や地域社会の中で自立生活をしていくことは、さまざまな困難が伴う。また、障害が重度になればなるほどそれらの困難性は増大し、周囲からの援助が必要となる。

しかし、障害が重いからといって、何ひとつ育ての中で身に付けさせる必要がないということではなく、障害の程度に応じた適切な方法を模索しながらかわっていくこと、その中でひとつでも多く自らできることを増やしていくことが、自立の度合いを高めることにつながる。例えば、排泄がうまくできない子どもが、排泄の指導によってできるようになることは、自立への大きな進歩であり、本人にとっても大きな成就感や満足感をもたらすものであろう。

## 三 知的障害児（者）の自律とは

自律とは、たとえ障害がどんなに重くても、援助してくれる人に精神的に甘えたり、依存したり、また、一方的機械的にやらさ

# 障害児教育雑記帳(4)

## 知的障害児（者）の自立について

学校教育学部  
障害児教育教室

船津 守久

れたり動いたりするのではなく、ひとつでも多く、自らの意志と判断で目標に向かって主体的に生活することである。

知的障害児（者）の場合、日常生活の基本となる身辺処理能力や日常生活動作、作業を通じての適性発見や作業能力の開発などが課題とされることが多いが、それらを核として自発性の芽を引き出し、主体的に取り組もうとする意欲や意志を発揚させることが、自律へとつながる。

## 四 自分のことは自分で

今、知的障害児（者）に求められていることは、まず、自分のことは自分でできるだけ自分でするということであるが、そのためには周囲の協力が不可欠である。

身の回りのことでもひとつひとつ指示されないで動けない、ということが指摘されるが、一方、「指示をしないとやらないからしかたがない」と小さい時から何にでも手を貸してしまっていることも、見逃せない事実である。

最近、統合保育や統合教育が普及し、周囲の理解も深まってきたが、反面周囲の子どもたちが必要以上に手を貸してしまい、障害児の自主性の育ちを阻んでしまっている例を良く見かける。

小さい時から、お手伝いなどを通じて自分でできることは自分でやる、という気持ちを育てていくことが必要である。

## 五 身の回りの整理整頓

整理整頓は、快適に暮らすための第一条件である。自分のものと他人のものとの区別をつけること、自分の持ち物がはつきりしたら自分のものには責任をもつことが要求される。

知的障害をもつ人の多くに、引き出しに何もかもごちゃ混ぜにして詰め込んでいたり、不用品を捨てることができずに貯め込んでしまっていることが見られる。

整理整頓のためには、まず分類して収納すること、同じ種類のものと同じ場所に保管すること、布団のたたみかたや掃除の手順を身につけておくこと、などが達成課題となる。そして、掃除の終わった綺麗な部屋、洗濯してたたんだ衣類、入浴後の爽やかさなどが、気持ち良いと感じることができるとも重要なことである。こうした清潔感、幼い時から育まれ身につけていくものとされる。

## 六 ルールを理解し守る

やって良いことといけないこととの区別がつくこと、社会のいろいろなルールに従えることは、社会的な自立のために欠かすことができない。

一方、そうしたことの理解のためには周囲の配慮も必要である。本人が明らかに間違った考え方をしているも、批判、命令、説教、否定、また誘導尋問などを行うこと

は、かえって逆効果に終わってしまうことが多い。

「そんなことをしたらいけない」などといった注意の仕方は、励ましたりアドバイスをしているつもりでも、障害児（者）自身、自分が否定されたり嫌われていると感じてしまう。「こんなふうにした方がよいのではないかな」とやさしく正しい解決の方法を示してあげることが、本人にとって大きな励みとなるのである。わざとルールを守らないのではなく、どのようにしたらいいのか理解できていないことが多いことを周囲は分かっているべきである。

## 七 心のゆとり

好きなアイドルの写真を自分の部屋に飾ったり、ペットを飼ったり、趣味を持つたりすることが、心のゆとりを持つことになり、生活の質を高めることにつながっていく。そのためには、小さい時から自分のことは自分でやろうとする気持ちを持ち、実際に努力を重ねることで、成就感や満足感を得て、自信を持ち、暮らしの実力を培っていくことが必要である。

周囲も、知的障害児（者）の可能性を信じてかかわっていくことを心がけるべきである。

### プロフィール

◇（ふなつ・もりひさ）

◇昭和二十三年三月二十四日生まれ

◇熊本県水俣市出身

◇昭和五十一年より平成二年まで福岡教育大学に勤務、平成二年より広島大学学校教育学部へ

◇趣味 魚釣り、園芸

